

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(47)

江碧にして
鳥逾白く
山青くして
花然えんと欲す
今春看又過ぐ
何れの日か
是れ帰る年ぞ
(杜甫「絶句」)

(河は緑に輝いて、鳥はますます白く引き立ち、山は青く際だつて、花は燃えるように真っ赤に色づいていく。今年の春もみすみす過ぎ去ってしまった。いつになれば故郷に帰ることができよう)

この漢詩は、中国の詩人杜甫(七一―七七)が、戦を避けて移り住んだ場所から、故郷を思い慕って詠んだものです。鮮やかな春の装いに開かれながら、いまだ故郷に立ち帰ることのできない辛い心情が込められ

ています。

思えばこの春も、駆け足で通り過ぎていったように感じます。ただこの束の間に、突如として襲った熊本を中心とする大地震は、大地と心に大きな爪痕を残していきました。今なお、胸を締め付けられる思いで、月日を重ねている方々もいらっしやるでしょう。一刻も早く、以前の故郷での生活が戻りますことを、心より願ひ続けて止みませ

茂りあふ
青葉も辛し
木の間に
光を花の
夏の夜の月

(「文龜三年歌合」政頭) 茂りあつて見る青葉もよそよそしく見える。木の間からは、光を花のように散らしている夏の夜

の月が輝いている)の月が輝いて、若葉の梢も、少しづつ落ち着いた青葉へと移り変わってききました。勢いよく重なり合う新緑に、夏の足音を告げる月光が静かに降り注いでいます。季節は今、瑞々しい初夏を迎えています。

先月号では、十種類の善い行いのはじめとして「不殺生」を取り上げました。続いて今回は二つ目の「不偷盗」の教えについて書いてみたいと思います。

昭和三十年代の高尾山の出来事。いつものように山内のお堂を参拝していると、お地藏様の足元に供えられていたお賽銭が、いつも夕方になると消えていることに気づいたそうでした。それは何日か続きました。そこで「これは誰かがお金を盗っているのではないか」ということになり、何人かで待ち伏せをして、泥棒を捕まえようとして試みます。



青葉映える青空に初夏の到来を感じる

折り折りの記(81)

波多野 重雄

アカシヤの花の揺り籠はぐれ猿
わが国でアカシヤというのは「ニセアカシヤ」のことである。棘の多い落葉高木で初夏を彩る白い蝶形の花を咲かせる。札幌、北京市の並木はつとに知られている。
或る日、私はケープルの「高尾山駅」に大勢が見下ろす満開のアカシヤに猿が、風に揺れ見え隠れするのを見た。私は嘗て、歩いたことのある新疆(中国)の、灼熱の火焰山の麓を玄奘三蔵は天竺へ向った。西遊記の中で鉄扇公主と孫悟空が戦った場所であり、その妖猿を重ねてうつつりした。
(高尾山健康登山の会々々)

初夏遊歩

厚木市 荒井 一雄

空の青
木々の緑に鳥がなき
高尾の朝湯に酔ひを醒めたる
一步一步、頂上へと向かふ...
緑葉・大樹に、生ける
神魂の降臨するを感ず...
山道を後続(の人々)に譲り、
暫し休憩...
返景(夕陽の照り返し)は、
(大気の澄める)東方の
(遙か房総半島の)
空や山々をも、見事に
真紅に染めをることよ...

ある日のこと。お賽銭を手にした男を見つけると、すぐさま、その場で取り押さえました。さっそく麓の駐在所に突き出そうと考へ、まずはお寺に引き連れてきたのでした。すると、その騒動を聞きつけた高尾山薬王院前御貫首・山本秀順師(一九一―一九九六)は、大広間に皆を集めました。そして、次のように静かに語り始めました。「僧侶であれば、修行をして説法をするはずなのに、このように捕まえるとは何事でしょう。もしかすると、お腹が空いているのかも知れません。警察に連れて行くなどと言う前に、まずは食事を振る舞い、話を聞くべきではないでしょうか。」

「一三五二(以後)の『徒然草』の一節を思い浮かべます。他人の心になつてみれば、愛おしい親や妻子のために、恥をも忘れて盗みをしてしまうこともある。盗人を縛り上げ、悪事を罰するよりは、飢えたり寒い思いをしたりしないように、世の中を治めるべきではないか。人は、生活が安定していかない、心も落ち着かない。追い込まれて盗みをするのだ。世の中が良くなるためには、罪は消えるはずもない。法を犯させておいて、罪を罰するのは可哀想なことではないか。」

「徒然草」一四二段) 罪を戒め、罪を犯せば罰せられることは、至極当然のことのように思います。しかし同時に、その背後に隠れている困難にも目を向けなければならぬ。中国の故事にちなんで日本では盗人のことを「白波」と呼びます。白く砕ける波は、もしかすると心の乱れを表しているのかも知れません。荒れ狂う波が風いで、穏やかになった水面にこそ、まだかな心月が光り輝くのでしよう。
(空海「十住心論」)
(自分が持っている物でも、いつも満足し、葉っぱ一枚でさえ、決して取ることはしない)
自らの資財に於いて、常に知足を知り、乃至草葉も与えられざれば取らず。

この逸話を聞いたとき私は兼好(一二八三頃) (住職談)

「生命を盗む」ことから、「無駄に生き

なからえる」という意味です。人間は、何気ない日常の中で、何も盗んでいないつもりでも、生きのために肉や野菜を食べ、動物の命を奪っています。知らず知らずのうち「身の罪」を「積み重ね」てしまっているとも言えるでしょう。